

琉球大学学術リポジトリ

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の(再)教材化への一考察

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2017-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大胡, 太郎 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/36709 |

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』の（再）教材化への一考察

大 胡 太 郎

はじめに

仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』初版最終章「浄魂を抱いて」は戦後沖繩県において既に教材として扱われてきた¹⁾。本稿は、その状況や、そのなかで取り組まれた教育実践をふまえたうえでの、二一世紀の現在において「再教材化」するための試みである。

戦後の民主主義社会を守り維持するために、先の世界大戦の記録、記憶の継承は必要不可欠である。まして、沖縄戦は、勝つ見込みなどないどころか勝つという目的すらない「捨て石作戦」であり、さらなる戦争維持のための持久自滅戦であった。このような凄惨極まる戦争の記憶を、生存者がいかようにとらえ、自らの体験記憶として抱え、さらにはそれをどのように語ったか、そしてそれをどのように戦争を知らない私たちが受け止め、さらに伝えていくべきかという継承のあり方に教育の果たす役割は大きい。

一 「浄魂を抱いて」の成立

仲宗根政善が沖繩戦の戦場で被弾し、九死に一生を得て民間人収容所で回復してゆく頃、日本兵収容所においては早くも「ひめゆり物語」とでも呼ぶべきひめゆり学徒隊をめぐる「殉国美談」が書かれ、慰安のための朗読会や、筆写の閲覧読書として人気を博していた。活字媒体になる前に、日本兵捕虜による書写の過程で多くのヴァリアントを生んだこの「姫百合の塔」物語は、日本兵捕虜の三瓶達司が「取材」に基づいて「創作」したものが「原作」で、実在したひめゆり学徒、金城信子・貞子姉妹を主人公にしつつ、多分に虚構を交えたものであった。これが戦後数年内に、本土に復員した元兵士などから広まり、さらに作家の作品なども生み出しつつ日本のメディアに媒介され全国的な人気を博し、言わば「ひめゆりブーム」と呼びうる状況となっていた。

仲宗根がこのブーム的状况に対して強い違和感を抱き、あるいはそれ以上に危機感を持ちつつ、『沖繩の悲劇―姫百合の塔をめぐる人々の手記―』初版（華頂書房、一九五一年、以下、初版・華頂版『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』あるいは『ひめゆり手記』）にまとめるべく、ひめゆり学徒の生存者に手記を寄せるよう依頼し、それを「正確」を期した「実録」として編纂作業を行い、犠牲者たちの七年忌に合わせるように上梓した（ただし、初版序文には「七年忌を迎えるまでしまいこんであつた」とある）。

初版『ひめゆり手記』の最終章として執筆された「三五 浄魂を抱いて」の章に記されているのは、まさにこの戦後数年間の、仲宗根政善と犠牲者女子学生の「浄魂」と、その遺族とのコンタクトやその遺骨、遺品の収集や引き取りなどその渦中における仲宗根や遺族の悲しみ、罪責意識、そしてその中から生み出された、仲宗根の戦争観、死生観、平和への希求、さらにはそれを超えるようにして語られる、死者たる女生徒たちとその遺族や仲宗根との、生死を超えたコンタクトへの希求であった。

殉国美談化された「ひめゆりブーム」と、これに対峙するような位置に置かれた仲宗根の活動や思索との同時性は、一方的に女子学徒の死を追悼し、「英霊」化する動き²に対しての、ひめゆり学徒たちとその引率教師たち、さらに遺族の、死者と生存者との生死を超えた記録であり、かつまたそれは後世への記憶の継承へと繋がっている。

仲宗根にとって、ひめゆり学徒であった彼女らは「英霊」などではありえず、「浄魂を抱いて」の冒頭では「日本兵も沖繩住民も……幾万の屍が累々として風雨にさらされ、亡魂恨み泣き……」（傍点筆者）と、ほかならぬ仲宗根によつて語られる。未だその死に場所も知られず、未だ遺骨を家族に拾われることもない屍は救われず、死者はまさに文字通り「亡魂」であった。六月二三日の組織的戦闘の終了後の伊原野の状況をこのように描写したあと、「浄魂を抱いて」は時系列的に仲宗根と彼の家族との再会や、訪れてきた遺族と面会し悲しみ、苦しみ、罪責感を抱く自身を描いてゆくが、その冒頭の少しあと、一九四六年三月の条に、沖繩本島南部から仲宗根の勤務する沖繩諮詢会事務局に届けられた遺骨箱に記された「浄魂」の文字のことに触れる。

職場から当時住んでいた石川の仮テント小屋にその遺骨箱を、「包みきれぬ悲しみにうなだれながら浄魂を捧持して、小路を辿つて」帰る仲宗根は「浄魂を肩より低く下げることは忍びなかった」と語っている。この時、仲宗根にとつて、遺骨や遺品を通して知らされる教え子たちの死は、「亡魂」ではなく「浄魂」へと、悲しみや苦しみ、罪悪感とともに抱きとめられる、抱きとめねばならないものへと変わったと言えるのだろう。

それ以後の、この「浄魂を抱いて」の章には、死した学徒の死地を尋ね歩く仲宗根や遺族の姿、遺骨や遺品にまつわる涙や悲しみ、それを受け止める仲宗根の姿が書き重ねられてゆく。さらに、戦後に生まれたばかりの仲宗根の子がわずか二日でこの世を去ったことや、仲宗根の母親の死に際した時のエピソードなどが折り重ねられ、いわば仲宗根を取り巻く死について、あるいはその死者の死後が「浄魂」たるべく、多くの死が描き出されている。と

言うより、これらの死を語りつつ、仲宗根はそのあまりに多い死を「浄魂」として語るることによって「浄化」をはかり慰霊していると読むべきなのだろう。

「浄魂を抱いて」の章は、仲宗根にあらかじめ「浄魂を抱く」資格があるから書かれたのではなく、執筆時期からみても、戦後、「ひめゆり物語」が戦場での実相からかけ離れて美談化されてゆく状況に、まさに背を向けるように書かれたと言いうるだろう。死した教え子の死地と死の実相、遺骨、遺品の収集作業、遺族などが学徒の死地とされる場所に木や紙に書いて残した慰霊の短歌の記録の作業などに駆り立てられているように、仲宗根は奔走した。その過程において、仲宗根の思想と行動は「浄魂を抱く」ような慰霊へと、さらには世界の恒久平和への希求へと、深まりと広がりをもつものになっていったとみるべきなのだろう。

二 仲宗根の戦場、戦後での死生観

前節で指摘したように「浄魂を抱いて」の章は、沖縄戦での教え子たちの死のほか、戦後生まれ、わずか二日でこの世を去った仲宗根の新しい子のことや、自身の学生時代に遡っての母親の訃報に接した時のことなど、多くの死がたぐり寄せられているが、これらの多くの死が語られる背景には、なにより、仲宗根自身の戦場での瀕死の体験を基盤とした死生観が張り付いている。

……愛児の寝息に起されて、私は夜中悪夢のような追憶にふけて寝られなかった。

二十年六月十九日、生徒解散の夜、午前四時、伊原の道路上で爆風に倒れて人事不省になった。意識を回復してから、照屋兄に扶けられて立上ると、ぬらくと血が流れているので、手を首筋にやると、頸動脈すれくゝに傷を負っていた。この傷あとに手をふれながら、わずか半センチの間にかゝる命の緒を思い、運命の不思議

を考えるのであった。死の瞬間に浮んだのはこの児のおもかげであり、心の底に核のように残っていたのは「子」という一念であった。生き残っている命は、未だにこの一念で貫かれている。すやくと寝る愛児の寝息を感じた時、私は過去に嘗て経験したこともない深い愛情を覚えるのであった。……⁴

戦場からの生存者によつてしばしば語られる生死を分けた原因を表す言葉、「数センチの差」「数十センチの差」という認識がここにも語られている。それは自らの生存と戦友の死とを分けたものであり、自らの生か死かを分けたものである。仲宗根においては、それは被傷箇所之差であった。仲宗根はそのことに「命の緒」「運命の不思議」という言葉を継いでいる。

引用したこの段落に先だち、「淨魂を抱く」とことと「戦後の生存」とが結び合わされる、仲宗根の戦後の姿が語られている。

淨魂を枕べに安置してから、朝夕礼拝をして自らの罪を悔いつゝ供養をした。夜なく戦場を駆けめぐる夢になやまさされ、重傷の乙女らのうめき声にうなされた。やがて教え児らは自分の心の神棚に安らかに祭られるようになり、乙女らの笑みこぼれるうるわしい姿が大理石像のように浮かんて来た。「どうぞ先生いきてください。」という声が聞えてくるようで心の落着も取戻した。自分の血管の中に、乙女らの若き魂が流れて身が温まるようにさえ感じられた。……(傍点筆者)⁵

この段は戦後の仲宗根の罪責感や戦争トラウマに苦しむ姿であり、また、教え子たちの死を「心の神棚」に安置しつつトラウマを乗り越え、「心の落着」を得られようになったことが語られている。この想像するに余る、苦しみに満ちた過程であろう「克服」は、この箇所では書き込まれず、「やがて」という一言によつてのみ繋がれている。しかし、この「やがて」という文言の重さと道のりの長さを読み落とすわけにはいかないであろう。

引用した段落の末尾は「敗戦の苦悩をなめながら、辛じて衰弱の身を支え得たのも亡き乙女らを思慕することから生れた力であった。」と結ばれ、先に引用した、「愛児に手枕させて寝ていると、……」に始まる、戦後の暮らしの中で、眠れぬ夜に自らの披傷と生存を回想するくだりへと、仲宗根は語りを継いでゆく。そして、自らの生存の意味は「子」への「深い愛情」の自覚へと辿られてゆき、この愛情とは「九死に一生の苦難が覚ましてくれた浄土の慈悲でもあろうか。」とこの段は結ばれる。

さらに次の段落では、この添い寝する子の姿を見つめながら自らの命について、次のように認識する仲宗根の自画像が語られる。

……幾千幾万年前からかっづいてこの命は、こうした危険を幾度くゞりぬけて今こうしてながらえているのであろうか。何という奇跡であろう。地上一切の生霊は全く奇蹟的に生きている。⁶

仲宗根の生命観を端的に表しているおぼしいこのくだりが語るのは、生命の連続性と、それを危機が襲いながらも、その連続性が断たれなかったという「奇跡」であるとの認識であり、それは先の「数センチの差」によって生存した命を語るくだりを呼び起こしつつ、仲宗根独自の運命観、死生観へと展開してゆくことになる。

三 運命という針ほどの細い軸

仲宗根改善の戦後の姿を決定づけたものと言ってよいであろう思想的基盤は、まず、戦争生存者に共通して感受されていたであろう次のような認識である。

……生き残った者は殊勝であったとか、死んだ者は勇敢であったとか、臆病であったとか、盡忠報国の
まい。……生き残った者は殊勝であったとか、死んだ者は勇敢であったとか、臆病であったとか、盡忠報国の

精神に燃えていたとか、信仰が浅いとか深いとか、一体そういうことが今次沖繩戦においてどれほど生死と関係があつたらうか。人間の個々の力はこの戦の前には殆ど零に近かつた。特に沖繩南端に迫るめらて行つた者に就いてはそう言える。生きるも死ぬも只偶然であり僥倖であつた。……⁷ (傍点筆者)

戦場で生死を分かつ、その何か。ある者は死し、ある者は生き残るといふ、戦争といふものが人間個人に与える、そして遺族につきつける、この理不尽中の理不尽は、生存者にも、死者の遺族にも深い悲しみ、傷と、さらに生き残つたことへの罪責感を抱かせる。仲宗根もその苦しみを抱いていた。

「修行」「智慧」「殊勝」「勇敢」「臆病」「精神」「信仰」「個々の力」と列挙されたこれらの「徳目(とその反対概念)」は、仲宗根によつて生死を分けた理由からことごとく排除される。教え子たちの死と自らの生存を分けたものは、「偶然」「僥倖」としか呼び得ない何かである。その何かを仲宗根はたぐり寄せつつ、同時にそれが別の何かに絡めとられてしまうことをも、仲宗根は峻拒するかのようだ。戦場における死にも生にも、そこには何の根拠も理由もなかつたかのように「偶然」であつたというとらえ方に収斂させようと思念を運ぶ。あるいは「拘泥」していると言つてもよいような、この「こだわり」にこそ刮目すべきであろう。

この引用に続けて、仲宗根はこのように述べる。

……生き残つた生徒と死んで行つた生徒とを比較して人間のあさはかな智慧で生死の理由を判断することは到底不可能である。若しこの偶然僥倖を運命というならばすべては運命にさばかれたにすぎない。生きるべき者が生き、死ぬべき者が死んだなどとは、世間的な意味ではどうしても考えられない。生き残つた者には未だ果すべき使命が残っていると考えるのは、一つの生き方ではあつても、死んだ生徒達の使命が全く無くなつたとはどうしても考えられないのである。たゞ運命という針ほどの細い軸に支えられて生きのびているのである。

(傍点ママ)。

「偶然僥倖」はここで「運命」と呼び換えられ、生と死を「比較」して、そこに「人間のあさはかな智慧」で理由をつけることにも、「世間的な意味」で生者を慰めたり意味づけたりすることにも抗し峻拒するかのよう、仲宗根は、生存者に生存の「使命」があるならば、死者にも与えられた「使命」は未だ失われていないとする。「生きるべき者」と「死ぬべき者」があり、それゆえに生死は分けられたというとならえ方を受け入れないことを、仲宗根は、いわば「選択」している。そしてそれゆえに、生者の「生」も「運命」という針ほどの細い軸に支えられて「あるもの」という「透徹」した認識へと到達する。それゆえ仲宗根は、「命の緒」。「針ほどの細い軸」によって「支えられ」た自らの命には多くの死者も繋がっているとするのである。

こうして生きのびた命の底には悲しみが深淵のようにたゞえられている。天地の始まりからの悲しみも、累々たる乙女らの屍の中からも伸びている若草のような命を、自分は生きている。太陽のもとで現実には芽を出して生きている自分の命は、永遠に去ってしまった生徒達の死とそのまゝにつながっている。悠久の過去から刻々にくり出されている私の命の緒は乙女らの血に染められてしまった。¹⁰

ここに、これまで読み込んできた死生観、運命観、罪責観がひとつの生命観に統合された姿がある。仲宗根にとって自身の命は、「悠久の過去」から「奇跡」のように繋がってきた、そして教え子たちの死からも繋がっているものでもある。この生命観、死生観に自身の「心の落着を取戻し¹¹」てゆく過程が、先にふれた「やがて¹²」のひとことに込められていた「重さと道のり」であろうし、この「浄魂を抱いて」という章を最終章に置かせるゆえんであろう。そして、それゆえ『ひめゆり手記』が、全体として「記録」にとどまらない、戦争と戦後に架けられた死／生や披傷、悲しみらを貫く主題的な重大な認識、戦場の記憶と戦後の死者と生存の記録を伝える力をもった書物

となつたと言える。

四 「浄魂を抱いて」教材化に向けて

「浄魂を抱いて」の後半から末尾の執筆時点の一九五一年に至る、すなわち沖縄戦終結から戦後五、六年後まで（言うまでもなく初版出版の五一年以降も）、仲宗根のもとに、あるいは仲宗根もたびたび訪れた南部戦跡の地にも、教え子達の遺族は訪れており、その遺族たちに接するたびに仲宗根はもうひとつの、願望とも希望とも呼びうる想念が浮かんでいたとおぼしく、先の引用に続けて以下のように語っている。

沖縄最南端の喜屋武海岸の断崖においてめられた生徒は、岩盤にピンで最後の言葉を記していた。親に知らせたい最後の文字であった。それが未だに人目にもふれずに、そのまゝ残っているにちがいない。そうして真新しかったその文字も今は苔むし、磯虫の足に踏みつけられているのである。磯虫が靈感を本能的に持つていて、微細な刺戟にも感応する^とぎすまされた母の靈臺につたわってくれたらと、私は時々とりとめのないことを考へる^{こと}がある。（傍点ママ）¹³

さらに、以下のようにも記す。

……ふと足許を見ると鉄兜があり、屍がころがっていた。親や妻子の夢にもあらわれずに、勇士はこうして臥している。沖縄全島、野にも山にも海辺にも、幾千幾万の屍が、人目にもふれずに伏している。……¹⁴

仲宗根が希求するこの「伝達」、「磯虫」が、あるいは「夢」が遺族にその死と死地を伝達する「希望」は、「伝える」という死者からの能動というより、遺族の「受動」、受け止める「靈感」すなわち本来の意味でのインスピレーションのごときものように読めよう。それは、仲宗根による、記録を超える伝達のありかたの模索であり、遺族

らに最期の姿を伝える遂行的な行為¹⁵の希求でもあろう。そしてそれゆえ、この「浄魂を抱いて」の章は、かつ『ひめゆり手記』初版は、以下のように結ばれる。

……若し、この血の島のこうした悲惨事が人類に記憶されないならば、再び戦はくりかえされるであろう。こうした記憶が人類史上に残り、「血の島」沖繩がやがて聖地として浄められ、世界平和の記念の島たらんことを祈ってやまない。(傍点ママ)¹⁶

ここで仲宗根が「記憶」と言い「記録」としないのは、『ひめゆり手記』序文にある、本書を「文学」ではなく「記録」として残すという意図とつなげて理解する必要がある。

言うまでもなく、仲宗根や学徒遺族にとつて、死者の死地の確定や遺骨、遺品の収集、慰霊は、初版出版時には未だ完了しない、長い道のりそのものであった。版を重ねるたびに『ひめゆり手記』は充実してゆくが、その充実の最も中心たるものとして「ひめゆりの塔に祀られた戦死者」名簿と写真掲載があつた¹⁷。そして、本書は幾たびも増補改訂¹⁸されながら現在に至っている。

二一世紀の現在も沖繩では、不発弾も遺骨も未だ残され、その作業は未完了である。仲宗根の言う「記憶される」とは、『ひめゆり手記』という「記録」を通して、いわば「記録」を超えること、「記憶」となり、仲宗根自身へ、遺族へと伝わり、そしてさらにその「記憶」が「記憶の伝わり」そのものとして後世に読む者へと伝わることでありと受け止められよう。これが仲宗根が本書、なかでも「浄魂を抱いて」の章に託したことなのではないか。そしてそれは『血の島』沖繩がやがて聖地として浄められ、すなわち、「亡魂」「生霊」が「浄魂」へと「浄化」される契機としてあり、これ以上ないほどの生の肯定と、戦争の否定、平和への希求を、私たちに提起してくるのであり、それゆえ既に、『沖繩の文学 高校生のための副読本／近代・現代編』¹⁹へも繋がれてゆく必然性をもって

いた。それゆえ、教材化された過去を踏まえつつ、教室に「浄魂を抱いて」は何度も運び込まねばならないし、それによって、いま・ここを出発点とした「豊かな学び」を作り上げることが求められている。

参考文献

- 仲宗根政善 『蚊帳のホタル』 沖繩タイムス社、一九八八年
- 『ひめゆりと生きて 仲宗根政善日記』 琉球新報社、二〇〇二年
- 小林照幸 『21世紀のひめゆり』 毎日新聞社、二〇〇二年
- 『ひめゆり 沖繩からのメッセージ』 角川書店、二〇一〇年
- 下嶋哲朗 『平和は「退屈」ですか 元ひめゆり学徒と若者たちのSSS日』 岩波書店、二〇〇六年
- ジュディス・バトラー 『触発する言葉 言語・権力・行為体』 岩波書店、二〇〇四年
- 富山一郎 『増補 戦場の記憶』 日本経済評論社、二〇〇六年
- 坪内祐三 『靖国』 新潮社、一九九九年
- 仲程昌徳 『沖繩の戦記』 朝日新聞社、一九八二年
- 『「ひめゆり」たちの声―『手記』と『日記』を読み解く―』 出版社Mugen、二〇一二年
- ホミ・M・バーバ 『文化の場所 ポストコロニアリズムの位相』 法政大学出版局、二〇一二年

1 沖繩における高校教育での仲宗根政善「浄魂を抱いて」の教材化、教育実践については、奄美沖繩民間文学学会シンポジウム「伝統文化と学校教育」の基調講演にて、大城貞俊氏「副読本『沖繩の文学』『郷土の文学』の出版事情」（二〇一六年九月十一日、於沖繩国際大学）にて総括的に報告されている。

2 ただし、GHQの占領統制下にあったこの時期は靖国神社の英靈祭祀活動は停止されており、靖国神社を廃止する動きの中にあり、靖国神社が「英靈」化しようとしていたわけではなく、国民の対沖繩感情として「ひめゆり学徒ブーム」があった。この戦後初期からの本土における「ひめゆり物語」の成立については、拙稿「収容所の（ひめゆり言説）―ヴァリアントとしての三瓶達司「姫百合の塔」と宮永次雄「姫百合の塔」をめぐって―」（『琉球アジア社会文化研究』琉球大学琉球アジア社会文化研究会、第4号、二〇〇一年）にて論じた。

3 仲宗根の戦後初期からのこのような活動の記録として、仲宗根の残した緑の皮表紙の手帳、通称「緑の手帳」が残されている。ひめゆり学徒のみならず、他学校の女子学徒、男子勤王隊の犠牲者などの氏名、死地、その場所の簡略な地図、慰霊のため残された短歌など多岐に及ぶ内容である。

なお、仲宗根の慰霊の心の軌跡を描いたものとして歌集に収められた歌群を論じた拙稿「ふたつの〈帝国〉のはざまのスピリチュアリティ」（日向一雅編『源氏物語の礎』青簡社、二〇一二年）も参照されたい。

4 『沖繩の悲劇 姫百合の塔をめぐる人々の手記』華頂出版、一九五一年、p.274 本稿では、仲宗根の初版執筆時である一九五一年頃の状況を踏まえるため、『ひめゆり手記』初版から引用する。ただし、旧漢字は新漢字に改めた。

5 同書 p.273

6 同書 pp.274-5

7 同書 p.275

- 8 同書 pp.275-6
- 9 同書 p.274
- 10 同書 p.276
- 11 同書 p.273
- 12 同書 p.273
- 13 同書 p.280
- 14 同書 p.281-2
- 15 「遂行性」「行為体」の概念は、ホミ・バーバ『文化の場所』（法政大学出版局、二〇一二年）、ジュディス・バトラー『触発する言葉』（岩波書店、二〇〇四年）などを参照した。
- 16 『ひめゆり手記』初版 p.282
- 17 一九八〇年刊行の『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川書店版に掲載される。一九八二年以降の角川文庫版『ひめゆり手記』には掲載されず、全容は一九八八年に開館したひめゆり平和祈念資料館で展示されている。
- 18 書名も変更しながら、①『沖繩の悲劇 ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』華頂書房、一九五一年、②『実録 ああ ひめゆりの学徒』文研出版、一九六八年、③『沖繩の悲劇 ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』東邦書房、一九七四年、④『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川出版、一九八〇年、⑤同題、角川文庫、一九八二年、⑥同題、角川文庫改訂再版、一九九五年、および角川ソフィア文庫版。

19 『沖繩の文学 高校生のための副読本／近代・現代編』沖縄県高等学校障害児童学校教員組合編、一九九一年所収。

なお、注1に触れたシンポジウム基調講演にて、講師の大城貞俊氏は以下の5点を、この副読本を沖繩の高校生に取り組ま

せてきた基本的姿勢として指摘している。

- ① 卑下することない語り
- ② 相対化する視線
- ③ 方言―言葉への関心
- ④ 学習を広げる
- ⑤ 普遍的な価値、未来志向